

み かわ し しゅう 美 川 刺 繡

○美川刺繡

美川刺繡は、国指定の伝統工芸の加賀縫いのことで、美川町の刺繡をする人が大勢いたため、そう呼ばれています。

○美川刺繡のはじまり

美川刺繡は、今から約120年前の明治23年（1890）に餅田半次郎氏が京都から教師を招き、子女にハンカチ刺繡を習得させたのが始まりです。

北前船で栄えていた美川町でしたが、その頃には不振となり、町内の婦女子の有望な手内職として輸出用ハンカチに着目しました。しかし、経営が思うにまかせず、しばらくして事業を委譲しました。

明治25年（1892）に竹中忠松氏が姻戚になる寺井村の陶器輸出商綿野吉二氏の援助を得て事業を軌道に乗せることに成功しました。町内外に数箇所の工場を持ち、一時は230人の工女を雇用して盛況でした。

○美川刺繡の広がり

竹中氏が軌道に乗せた輸出用のハンカチでしたが、明治40年（1907）ころから、綿野氏の貿易がうまくいけなくなり、資金に窮した竹中氏は廃業に追い込まれました。

明治44年（1911）、小松の吉井興一郎氏が初めて国内向けの半襟刺繡を始めました。吉井氏は新しい技術を教えてもらうため、京都に行かせたり、教師を地元で招きました。また、販路を拡大するため、北海道や樺太にまで、行商に出向きました。努力の甲斐あって、半襟刺繡は評判を呼び、京都や東京のデパートからも注文が殺到するようになりました。そのお蔭で、半襟刺繡をおこなう人が増え、工場が14になりました。

昭和2年（1926）、笠間由太郎氏の娘初枝氏が帯や紋付の大模様専門の刺繍を始めました。このように、新たな分野が開拓され、工場は21になりました。昭和6年（1931）に刺繍組合が結成され、昭和8年（1933）には、美川尋常高等小学校高等科に「刺繍科」が加設されました。美川刺繍業は益々盛んになり、昭和9年（1934）には、工場数27、職工750人までになりました。ところが、日中戦争以降（1930年ころ）、物資統制が強化され、刺繍で用いる糸がなかなか手に入れることが難しくなり、またぜいたく品に対する人々の目が厳しくなり、致命的な打撃を受け、ほとんどの工場は経営不能となってしまいました。

○戦後の美川刺繍

戦後（1950年ころ）美川に住む婦人たちが数名が手内職として、美川刺繍の復興を支えました。

百山市美川地区では、国指定の加賀縫い伝統工芸士として、三輪ミトリ氏、奥田 恵子氏の2名がいらっしゃいましたが、平成18年12月に残念ながら三輪ミトリ氏がお亡くなりになられ、現在は奥田恵子氏お一人となりました。

平成時代となってからは美川生活学校の方々が美川刺繍に取り組み、石川県民天学校の科目として今は受け継がれています。